

その差は大きい

目次

喜びが幸福を生む	1	霊の火を消してはなりません	20
幸いなる秘訣	2	人間となる	21
おかげ、さまに気づく	3	万事が益となる	22
「分かった」と思うな	4	人間であることの有り難さと責任	23
その差は大きい	5	食物は「賜物」	24
欲望を正しく用いる	6	あなたの負いめ赦された	25
神は支えて下さっている	7	この世をよく生きる秘訣	26
幸いへの転換	8	悩むな、苦しむな	27
神にある賢い人	9	つづけること	28
人生は偶然ではない	10	花をよく見なさい	29
信仰の強い人弱い人	11	死と死後の裁きを考える	30
決断	12	人生は成熟への道のり	31
慰めを得る者	13	人間の心の世界は深遠	32
打ち明けつづける	14	「人間本来無一物」	33
人生には意味がある	15	そのままにしておきなさい	34
悪魔の働き	16	りきむのはやめましょう	35
行いの大切さ	17	宗教的生き方	36
いつも共に居てくださる	18	神の大決定に生きる	37
死も命の現れ	19	報いてくださる	38

喜びが幸福を生む

松下昌義

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい。これこそ、キリスト・イエスにおいて、神があなたに望んでおられることです。

―テサロニケの信徒への手紙Ⅰ五章十六節―

幸福でいたいと願うなら、いつも喜びを忘れずどんなことにも感謝することでありませう。喜びをもつことが幸福を生むのであって、幸福が喜びを生み出すのではなく、幸福が感謝を生み出すのではなく、感謝することが幸福を生み出すのです。ですから、幸福を倍加したいと思うなら、他の人々に幸福を分かちつことす。なぜなら、幸福は自分の手にはいる物の数にあるのではなく、それをあなたと共に楽しみ喜ぶ者の数によるのです。

×
自分自身だけ幸福になることが成功ということではなく、人をも幸福にすることこそ本当の成功といえます。そのことによって、その人はより大きい成功と幸福へとすすむことが出来ます。

喜びと感謝を持って生活するということは、善を肯定し愛をもって親切に人に接することであり

ます。たとえ周囲の人々がぶつぶつと苦情を言い、不満と無気力とを洩らしていても、感謝と喜びとを表明しているなら、多くの人はあなたを信頼し、あなたの言葉に耳を傾けるようになるでしょう。

×
少しのことに感謝する者に、神は必ずもっと大きい感謝すべき事を与えてくださるでしょう。感謝することは、神の恵みを更に多く受ける資格を持つ唯一の条件であります。

×
静かに自分を振り返り、どれほど沢山の恩恵を今まで受けて来たかを思い、それらのことを楽しい感謝の意識と結び付け、万感の思いを込めて「ありがとうございます」と感謝の言葉を神に対して祈るなら、神に愛されている自分に気づかされ、生活に勇氣と力と安心とが生まれて来るでしょう。

×
生活の中で喜びを見出し、感謝することを忘れない者は、ますます喜びと感謝するに相応し、幸福を得、不満と苦情で嘆いてばかりいる者は、得るべき喜びも感謝も失ってしまいます。

×
持っている人は更に与えられて豊かになるが、持っていない人は持っているものまでとりあげられる。―マタイ十三章十二節―



幸いになる秘訣

松下昌義

感謝して受けるなら、何一つ捨てるものはない。

— テモテへの手紙 I 四章 4 節 —

誰もが願うこと、それは平和であり平安であります。誰もが求めるもの、それは幸いです。

すでに出来上がった平和や平安が何処かにあるのではなく、それは自分で生み出すものであります。幸いという事も同じです。

私たちは、平和や平安が、また幸いが、既製品として何処かに有るのだと、品物を買うように求めようとします。しかし、それらは何処にも売ってはいません。平和も平安も、また幸福も商品ではありません。それらを製造する会社、それらを売る商店は何処にもありません。なぜなら、それは自分で生み出し造りだすものだからです。

どのようにすれば平和を生み出し、平安であり幸いであることができるのでしょうか。その秘訣は、感謝する心を持つことです。「有り難うございます」「有り難いことだ」と感謝する心を持つことです。感謝する心は誰もが持っています。また、いつでも何処に於いても出来ることです。

「だれに対して感謝するのか」「なぜ感謝しなくてはならないのか」と人は問います。

人は、見える対象、為すべき理由を求めます。しかし、感謝する心には、見える対象も為すべき理由などありません。感謝は損得計算の事ではありません。得すれば感謝し、損すれば憎む、見えれば信じ、見えなければ無視する。感謝はそのような利己的な思いの上に生まれて来るものではありません。

自分を愛してくれる人を愛し、自分の仲間だけに挨拶をしても何の報いがあるか。悪人でもそれくらいのことにはしている。とイエス様は申されます。そのような自分の損得を基準にしたところからは、愚痴や恨み憎しみ怒りが生まれ、決して心に平安をもつことが出来ず、幸福は生まれて来ないでしょう。

神さまは悪人にも善人にも太陽を昇らせ、雨を降らして下さる、とイエス様は言われます。気がつけば、私たちは多くものを無償で受けて生かされていく者です。有り難いことが、自分の内にも外にも沢山あり、それに囲まれ支えられて生かされているのが自分と言う者です。不満や愚痴を言う前に感謝しましょう。限りなく神に愛されている自分に気づいた人の内だけに平安と幸いとが自然に生まれてくるのです。



おかげさま、に おかげさまで、に

松下昌義

「主(神)の御心であれば、生き永らえて、あのことやこのことをしよう。」と言うべきである。

—ヤコブの手紙四章十五節—

「おかげさま」という美しい言葉があります。私たちの人生には、よく見える「明」な部分と人が智恵を働かせてもよく見えない「陰」の部分とがあります。その「陰」に「お」と「さま」という敬語をつけた言葉が「おかげさま」ということです。

私たちの人生は、自分の智恵で考え、自分の意思を働かせて決定し行動出来る「明」な部分と、自分ではどうすることも出来ない「陰」の働きの部分とが相い交わって展開されているようです。ですから、一つの事が出来たとき、その陰の働きに気づいている人は、どれほど自分が努力したとしても、陰の部分の働きの有り難さを見ることよって、「おかげさまで、できました」と謙虚に感謝するのです。

しかし、自分の努力や智恵の働きだけを見て、一方の「陰」の働きを見ない人は、自分の思う通りになれば誇り高ぶり、思うようにならなければ

「あの人、この人が悪い」と責任を他人になすりつけます。

見える「明」な部分を人の働きだとすれば、さしずめ「陰」の部分は神さまの御心の働きであると言えます。ですから、人生や、世界に起こるどのような事柄に於いても、必ず「神様の御心の働き」即ち「陰」の部分が、ある時には「警告」として、ある時には「訓練」の為に、又あるときには「祝福」のしるしとして、神さまが語りかけていらっしゃるそれを、信仰の智恵によって「おかげさまで、ありがとうございます」と言葉して受けたいとおもいます。

結局、人生の幸福の根拠は、自分にとって「苦しく・悲しく・つらく・何故だ」と思う事柄であっても、そこには必ず、自分には見えない神さまの満ち溢れる御愛の働きの「陰」となって働いていることを信じ、その神さまの御心に自分をおゆだねするところにあるのだと思います。

使徒パウロは苦しみの中に身を置きつつ、同じ苦しみの中に生きる教友に言いました。
神を愛する者たち、つまり、ご計画にしたがって召された者たちには、万事が益となるように共に働くということを、私たちは知っています。

—ローマの信徒への手紙八章二八節—



「分かつた」と 思うな

松下昌義

わたしは既にそれを得たというわけでは
ありません。なんとかして捕らえようと努
めているのです。自分がキリスト・イエス
に捕らえられているからです。

—フィリピの信徒への手紙三章十二節—

「解^{わか}っていないのに分かつた」と思い込んで
いる人は、とても醜^{みにく}く、お相手するのに困ってしま
います。特に、宗教とか信仰の事柄について、こ
のような「思い込みを持っている人」に出会うこ
とがありますが、そのような方には、自分自身の
姿に気づかれるまで黙っているのが最もよい対処
の仕方です。

使徒パウロは「わたしは既にそれを得たという
わけではありません。捕らえようと努めているの
です」と言いました。これが求道者の姿です。
「分かつた」と思うとき、その人は忽ち傲慢^{ごうまん}者に
変わってしまうのです。そこから生じてくるのは批
判、攻撃、不信、軽蔑、無視だけで、善きことは
何も生まれて来ません。

パウロはただ「捕らえようと努めた」だけでは
ありません。彼は、そのように自分を突き出し、

押し上げる大いなる命の滾^{たぎ}りを自分の内に、既に
持っていたのです。そのことを「自分がキリスト・
イエスに捕らえられているからです」と言いまし
た。ここにこそ、求道の悦楽があるのです。
彼は自分が真理である神の大いなる命に与^あかっ
ていることを知っています。それ故にこそ彼
は、その大いなる命に押し出されて、さらに深く
知りたく、喜びと希望をもつて求道せずにおれ
なくなつたのです。

この世の事柄においてすら、人が真剣に取り組
むなら、一生の時間でもなお不足に覚え、ますま
すその人は謙虚にならされてそれを尋ね求め続け
るように導かれます。ましてや、信仰の求道にお
いてはなおさらです。しかし浅薄な人は入口に立っ
ただけで「分かつた」と思い込む。

決して「分かつた」などと軽々しく言う軽薄人
間になつてはならない。傲慢ほど自分の愚かさを
さらけ出すものではありません。

「ああ、神の富と知恵と知識のなんと深いこと
か。だが、神の定めを究め尽くし、神の道を理
解し尽くせよう」(ロマ一・三三)とパウロは
告白しました。神の大いなる命に気づく者はます
ます謙虚にされ、深い愛の徳を身につける者とさ
れるでしょう。今、静かに自分を省みる者です。



その差は大きい

松下昌義

人間には、ただ一度死ぬことと、その後
に裁きを受けることが定まっている。

ヘブライ人への手紙九章二七節

私たちにとって確かなことが二つあります。そ
れは、死ぬこと、と死んだ後、裁きを受けること
だと聖書は教えています。

裁きとは、自分の行ったことの結果を自分が受
け取ることです。

思い違いをしてはいけません。神は、人
から侮られることはありません。人は、
自分の蒔いたものを、また刈り取ること
になるのです。自分の肉に蒔く者は、肉
から滅びを刈り取り、霊に蒔く者は、霊
から永遠の命を刈り取ります。

ガラテヤの信徒への手紙六章七節

これらは、ただの「曾し」的な教えではなく、
事実であり、大宇宙の自然の理なのであります。

この世で、自分の肉体的な利欲のためだけに知
恵と体と想念を使った者は、当然の結果として死
んだ後の世界では、その有効性をなくすのです。

しかし、この世で、自分の霊の養いのために使っ
た努力は、死んだ後の自分の霊的人生を豊かに生
きる命の養分となるのです。

×

人には二つの生活の仕方があります。一つは、
「肉に蒔く生活」です。つまり、この世の肉体的
命だけに自分の想念を働かせる生活です。もう一
つは、「霊に蒔く生活」です。つまり、この世の
生活を自分の霊性の養いのために想念を働かせる
生活です。この二つの生き方の結果の差は、死ん
だ後の世界では決定的な差をもたらします。

×

人の寿命は無常なり、出る息は入る息を
待つことなし。風の前の露、尚警えに非
ず、かしこきも、はかなきも、老いたる
も、若きも、定めなき習いなり。されば
先ず臨終のことを習うて後他事を習うべ
し。

愚かな者よ、あなたの魂は今夜のうちに
も取り去られるであろう。そしたら、あ
なたの用意した物は、だれのものになる
のか自分のために宝を積んで、神に対し
て富まない者は、これと同じである。

欲望を

正しく用いる

松下昌義

人はそれぞれ、自分自身の欲望に引かれ、唆され、誘惑に陥るのです。そして、欲望がはらんで罪を生み、罪が熟して死を主と

—ヤコブの手紙一章十四節—

だれもが欲望をもっています。欲望とは願望の思いです。満たされない願いを満たしたいと欲する心です。

欲望や願望は、神さまが私たちに与えてくださった有り難い命の働きです。欲望を失った人間は命を失った人と同じです。欲望や願望を活化させるところに、生きている有り難さがあるのです。

×

×

しかし、思慮なく欲望を活性化させる人は、包丁を振り回す人に似ています。人を傷つけ自分を傷つけます。台所の包丁は正しく使わなくてはなりません。正しく使うとき美しく美味しい料理が出来ます。それによって、人に喜びを与え、自分も喜ぶことができます。

欲望は悪ではありません。あなたが自分の欲望を正しく行使する知恵をもっていないことが悪な

なのです。

自分の欲望を正しく行使するためには、正しく考える知恵をもつことが必要です。

正しい考えをもっている人だけが、正しく生きることが出来ます。しかし、正しく生きる知恵に目覚めないうままに生きる者は、次々に愚かなことをなし老いて死ぬばかりです。そして死んだ後も迷いつづけるでしょう。

×

×

自分が神に愛されている者だと知るとき、正しく生きる知恵をもつ者となります。神が自分の人生を肯定し、幸いに生かそうと助け導いておられることを知り、その大いなる命の働きを自分の内に見いだすとき、生活は変り始めます。

神の導きにたいする疑惑、将来にたいする不安、物と人との廻り合わせにたいする恐怖など、神の導きの前では消えてなくなります。

神を愛する者たちには、万事が益となるように共に働いてくださるのです。この知恵に目覚めている者だけが、与えられた自分の欲望を感謝出来かつ、正しく行使することによって、自分も他人も幸いにすることが出来るのです。



神は支えて

下さっている

松下昌義

「靈」は弱いわたしたちを助けてくださいます。わたしたちはどう祈るべきかを知りませんが、「靈」自らが、言葉に表せないうめきをもって執り成してくださいるからです。神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くことを、わたしたちが祈ります。

——ローマの信徒への手紙八章二六節以下——

自分が、どれほど神に愛されている者なのかというところに、人は全く気づいていません。目に見えている親に愛されている自分であることさえ、すぐには気づくことが出来ないのが私たちです。ましてや、目に見えない神に、自分が愛されている、などということは夢にも思わないのも当然かも知れません。しかし、神は確かに私たちを愛しておいでになり、日々生かしてくださるので

×

、親がいたから、わかしたちは生まれ、親がさまざまな世話をしてくださったので、私たちの今日

×

があるのです。それと同じように、神が私たちを現代というこの世に生きる者として送り出して下さったのです。日々の命は、詰まるどころ神さまのものなのであります。生まれるのも死ぬのも、神の御手の下にあるのです。私たちは、ただ、許された間だけを生かさせて頂いている者です。

×

私たちは親に感謝する以上に、神に感謝しなくてはなりません。しかし、人はとても弱い者です。弱いとは、自分中心の思いに振り回されてしまう者だ、ということですから。利己的な思いが、時として親でさえ捨てる鬼のような亡恩の姿に人を変えてしまいます。ましてや、まったく見えない神に対しては、尚更のことです。

しかし、それでも神は私たちを愛して下さっています。感謝の祈りの一かけらも口にせず、神など自分には関係無いと無視して生きている人に対してさえ、黙々と支え続け、生かしつつ下さっているのが神です。

神こそ、人生究極の拠り所です。この神の愛に人が気づくとき、その人の命は喜びと安心、力と希望とに充滿することでしょう。「靈」とは、見えない神の手の働きです。



さいわい
幸いへの転換

松下昌義

わたしたちは自分が真理に属していることを知り、神の御前で安心出来ます。心に責められる事があるうとも、神は、わたしたちの心より大きく、すべてをご存じです。

ヨハネの手紙一三章十九節

わたしたちは神の善なる命から生まれ出た者であります。私たちの最も深い内奥が、神の大いなる命の流れに繋がっています。なんと有り難いことでしょうか。

それぞれの人生は神がそれぞれの祝福のために備え、与えられたものです。その神に自分の人生を感謝して生きる者だけが、人生をゆたかに出来る世界へ自分を光り輝かせて進めることができます。

たとえ心に責められる事があるうとも、神は、私たちの心より大きく、すべてを御存じです。なんと有り難いことではありません。

うなだれて、歩いている者は、この神の大いなる祝福のまえを通り越してしまいます。

そのような生き方をしていては、いつまでたっても、幸いへの転換は起こらないばかりか、暗い

ものがますます付きまといて来るでしょう。

どのような事柄も決して重苦しく見てはなりません。そのような見るなら、ますます重苦しく抑え付けられます。しかし、気づかねばならないことは、重苦しく自分を抑えつけている者は、自身自身の想念なのであることを。

はかり知れない愛と力とが、神さまによって豊かに与えられ、降り注がれているにも拘らず、それに気づかないのは、その人自身なのであります。

あなた方は見ても見ず、聞いても聞かず。

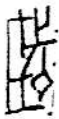
それ故に、悔い改めて救われる事がない。

と言われたイエスさまは嘆息されました。

神の絶対の愛の支配を朝に、昼に夕べに覚えて、どのような時にも、人生に対して不機嫌で腹立たしい思いをもたずにいると、神の善なる御意志はその人を肯定し、積極的に支え、大宇宙にみなぎる命がその者を肯定して動きだす。

人生に於ける最も大きい幸福と最も豊かな利得は、明るいところで感謝して正しく物事を積極的に見る信仰の心です。

なにごとについても、疑惑、心配、恐怖を自分の内から神のもとに放り込め。



神にある賢い人

松下昌義

人は自分の蒔いたものを、また刈り取る
ことになるのです。自分の肉に蒔く者は、
肉から滅びを刈り取り、霊に蒔く者は、霊
から永遠の命を刈り取ります。たゆまず善
を行きましょう。飽きずに励んでいればと
きが来て、実を刈り取るようになります。

ガラテヤの信徒への手紙六章七節以下

自分が為した行いは、その場かぎりでも無くなっ
てしまうのではなく、それら見えなくても、す
べて自分自身に蓄え、積み重なっているものであり、
やがて、時が満ちると、その結果の報いを必ず受
け取るようになるのです。

わたしたちは、いつも他人の目を恐れています。
他人の目が無いところでは、何をしても大丈夫と
安心していきます。しかし、それは愚か者の考えで
す。どのような場合にも必ず、見て知って、覚え
ている者がいるのです。それは自分自身です。ど
の人も、自分の行いのすべてを、自分自身に記録
しているのです。人はその記録を引きずって生き
つづけるのです。時が来てその記録は公開される
ことになり、一神はおのおのの行いに従ってお報

いになるのです

あなたは、かたくなで心を改めようとせ
ず、神の怒りを自分のために蓄えている。

この怒りは、神が正しい裁きを行われる怒
りの日に現れるでしょう。神はおのおのの
行いに従ってお報いになります。

ローマの信徒への手紙二章五節

×

×

「神はすべてを見ておられる。あなたは裁かれ
るぞ」と、恐喝じみたことを聖書は語っている
ではありません。そうではなく、言わば、「事
の理」つまり、当たり前道理を示しているの
です。ですから、次のように使徒パウロはかたりま
す。

つまり、こういうことです。惜しんでわず
かしか種を蒔かない者は、刈り入れもわず
かで、惜しまず豊かに蒔く人は、刈り入れ
も豊かなのです。各自、不承不承ではなく、
強制されてでもなく、こうしようと心に決
めたとおりにしなさい。

コリントの信徒への手紙Ⅱ九章六節

神にある賢い人は、天地の道理を弁え、創造に
於ける自然を生きることにより、人生の豊かな実
を得て、天の栄光の座に自分を置くでしょう。



人生は

偶然ではない

松下昌義

あなたがたの中で善い業を始められた方が、キリスト・イエスの日までに、その業をなし遂げてくださると、わたしは確信しています。

—フイリピの信徒への手紙一章六節—

天地宇宙は偶然に成ったものなのでしょうか。

また、私たちも偶然に生まれて来たものなののでしょうか。物事がそう成るべき理由なしに、たまたまそのように成った、と言うことが偶然という意味であるなら、天地宇宙のことはともかく、私たちの人生とは一体なになのでしょうか。

すべての人間が生きるべき理由などないのに、たまたま出来たこの世に、たまたま人として生きている者が自分であるなら、生きる意味や価値など何処にも見いだす事が出来なくなってしまうのではないでしょうか。

×

×

勿論、私たちは生きる意味や価値があるから今、生きているわけではありません。が、生きる意味や価値を自分の人生に於いて見いだすことが出来なければ、生き活きと生きて行けないのではないで

でしょうか。「わたしなど、生きていても、いなくてもおなじだ」と思う人生に人は耐えられるでしょうか。生きる喜びも無く、希望も無く、「やりたいことだけ奔放にして死んで行けばよいのだ」と虚無的な生き方に、すべての人がなれば、人間の社会は頹廢し混乱の極みに達し、必ずすべては滅んでしまおうでしょう。ひょっとすると、今の人間社会はそうになりつつあるのかも知れません。

×

×

天地宇宙も、私たちの人生も、目には見えない神の大きいなるご計画のもとにある。と言うのが聖書の教えです。それは、人間ひとりひとり、かけがえない存在として、この世に生かされているということの意味しています。

生きているということは、生かされているという事です。さらにそれは、神がその業を私たちの内ではじめておられるということです。

どのような人も、どこに居ても、かけがえない貴い命を与えられ、神にこよなく愛されて生かされているのが私たちなのです。だから人生は素晴らしい有り難いのです。神こそ、私たちの創造者、保持者、完成者なのだ、と聖書は告げています。このことに人間が気づくとき、個人に、社会に、世界に、本当の平和が訪れるでしょう。



信仰の 強い人と弱い人

松下昌義

信仰の強い者は、強くない者の弱さを担うべきであり、自分の満足を求めるべきではありません。おのの善を行って隣人を喜ばせ、互いの向上に努めるべきです。

—ローマの信徒への手紙十五章一節以下—

私たちは時として独善的になります。特に一つの宗教信仰や主義主張に生きている者が、陥る最大の誤りは独善という罫なまです。

自分だけ、また自分達だけが最も正しいと思ひ込む、独りよがりな独善と言うことです。独善の恐ろしさは、自分たち以外の者は敵だと思ひ込む傲慢と排他的心情にあります。仲間だけには笑顔を向け、外の者には侮蔑ぶげつと怒りの心情をいだきます。聖書はこのような独善を強く戒めています。

「信仰の強い者」と使徒パウロがいうとき、それは、ただ、素直に神さまの愛を信頼している人のことです。それに反して、自分の信心の深さを誇らしく思っている人を「信仰の弱い者」と言ったのです。

私たちは、熱心に教えを守り、教えから外れないように自分を痛めつけて努力している熱心の人を「信仰の強い者」と思っています。勿論、その

努力は善しとせねばなりません、その努力の底には「我」という「傲慢の鬼」が潜んでいることを見逃してはなりません。「我」をはった信仰は、鼻持ちならない傲慢心を生み、独善者にしてしまいます。一方、自分の「我」をすこしも張らず、ただ素直に神さまの愛に感謝して、自分の周囲にどのような方にも、優しい思いやりをもつて一緒にしましょうと、謙虚な生き方をしておいでなる方がいます。このような方こそ「信仰の強い者」だと使徒パウロは言うのです。

「我」をはって生きている人は、どの場合でも結局「自分の為」だけに生きている人です。それは利己的な生き方です。ですから、自分の満足が得られなければ、すぐに関係を「切ってしまい」自分は正義に生きたと、ひとり思い込んでしまうのですから、これは困ってしまいます。しかし、神さまの愛に自分を委ねて生きている信仰の人は、どの人も神さまの愛の内において平安に生きて頂きたいと念じていますから、その願い心で、どの場合でも関わって行きたいと思っています。その人は自分の「我」からでなく、神さまにお委ねした「安心と優しさ」から関わるのです。このような人こそ、本当に「信仰の強い者」だといえます。う。わたしも、このような「信仰の強い者」でありたいと願っています。

決 断

松 下 昌 義

兄弟たち、あなたがたに勧めます。あなたがたの学んだ教えに反して、不和やつまづきをもたらす人々を警戒しなさい。彼らから遠ざかりなさい。

一 口 マの信徒への手紙十六章十七節

自分の身を何処に置くかによって、その人は変わります。悪に自分の身を置けば、その人は悪に染まります。善に自分の身を置けば、その人は善に染まります。人は身を置く場によってその人に成ります。

しかし、自分の身を何処に置くかは、自分自身が決定するのです。自分の思いが、自分の生き方を決定するのです。

人はいつも決断を求められています。右に行くのも左に行くのも、その人の決断です。

狭い門から入りなさい。滅びに通じる門は広く、その道も広い。そこから入る者が多い。しかし、命に通じる門は狭く、その道も細い。それを見出す者も少ない。

一 マタイによる福音書七章十三節

×

×

人は、欲深い者です。蟻が砂糖に引きつけられるように、人は自分の感覺的欲望を満たしてくれるものに引きつけられて行きます。それが、後悔するかもしれないという予感をもって、なおそこへ行ってしまします。その結果、そういう自分の姿が当然のこととなってしまい、気づいた時は、すでに遅く、正に、後悔先に立たず、となります。

×

×

石はそこに黙って留まるしかありません。草木は、そこに留まり天に向かって自分をのばすのです。動物は自分の感覺に引きずられて動くものです。しかし、人は、自分の肉体と魂と靈とに配慮できる智慧を働かせ、自ら決断することによって生きることが、神に許されている者です。

×

×

それがどれほど立派に見え、楽しく思えても、自分の靈魂の救いを危険にみちびくような人たちの交際、また、そのような場所に留まるよりはむしろ、この世のどんな不幸をも耐え忍ぶように生きることを「決断」というのです。

人生を生きるには神の前での冷徹なる智慧と覚悟が必要でです。



慰めを得る者

松 下 昌 義

神は、あらゆる苦難に際してわたしたちに慰め下さるので、わたしたちも神からいただくこの慰めによって、あらゆる苦難の中にある人々を慰めることができます。

コリント第一の五紙一章四節以下

誰でも慰めを求めています。人の一生は慰めを求める旅なのかも知れません。本当の慰めに出会う人は、そこで幸福を得るのでしよう。

でも「慰め」とは何なのでしようか。聖書が言う「慰め」という言葉は「傍に招く」という意味です。なるほどと思います。

慰めは自分自身で作りますことはできません。

人の慰めは、人との関わりの中から生まれて来ることです。ですから、人との関わりが良好なら、その人は平安でいることができます。人間関係が良好なら、少しぐらい貧しくとも、また苦しみがあつたとしても、活き活きと生きて行けます。しかし、人間関係が暗く惨めで孤独でいるとき、お金や物が沢山あつても、寂しく哀しいものです。

子供は愛情に満ちた親が傍らに居るなら、生活は貧しくても、安心の内に身も心も健康に育ちます。私たちも自分の傍らに愛情と信頼できる人が

いるなら、安心を得て一生懸命に生きる事ができます。

でも、常に傍らにそのような人が居るとは限りません。一時は居ても、移り変わります。その人は死んで去って行くことがあり、こころ変わりして離別することあり、いつの間にか居なくなってしまう事だつてあるものです。これは人生の常です。イエスも弟子に去られ、パウロも人は何時も自分のことだけ考える」とポツリと語っています。

結局、人はみな孤独です。だから皆不安であり、その孤独の深淵を見たくないのです、不安を紛らすために何かで誤魔化しながら生きています。それでも、人はあきらめずに自分の傍らに居てくれる者を探し求めて生きています。

パウロが信仰で得たものとは何だつのでしようか。それは、永遠に変わらなず自分の傍らに居てくださる真実なお方に会つたことです。「世の終わりまで、何時もあなたと共にいます」と言われるキリスト様に出会つたことです。ここにパウロの力強い生き方の秘密があつたのです。

もう一度、くりかえして冒頭の彼の言葉を読んでもみましょう。

この世の者も事も、必ず去ります。そのような人生の現実で、変わらぬ神の愛に出会う者は、理屈ぬきに、幸いな者だと、しみじみ思います。



打ち明けつつづける

松 下 昌 義

どんなことでも、思い煩うのはやめなさい。何事につけ、感謝をこめて祈りと願いをささげ、求めているものを神に打ち明けてつづけなさい。そうすれば、あらゆる人知を超える神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくださるでしょう。

フリリピの信徒への手紙四章六節以下

人生にはさまざまな危険と困難があります。苦しいときだけでなく、楽しいときにも危険と困難があります。苦しいとき、悲しい時にはそれがよく見えますが、楽しいとき、嬉しい時にはそれが見えないだけです。ですから、楽しいとき、嬉しい時ほど危険や困難に気がつけなければならぬでしょう。まさに、人生油断大敵です。

×

×

人生の中に、危険と困難があるのでなく、危険と困難が人生そのものだと言えます。誰も不安を持たないで人生を生きて行くことはできません。しかし、多くの人達は不安を真つ正面から見ないで、それを適当に逸らし、粉らわして生きていま

す。不安と直接対峙することが恐ろしく、耐えられないことを知っているからでしょう。それでは、自分の人生に本当の安心は得られません。

×

×

先の聖書の御言葉は、人生を安心に生きる秘訣を教えています。危険と困難とがある不安の人生に有って、落胆しないで神さまに打ち明けつつづけなさい、と勧めます。何事につけ、遠慮することなく、赤裸々に神さまに打ち明けなさい、と勧めます。そうすれば、人の計らいを超えたキリストさまの保証のもとで、神さまは必ず、あなたのために最善をつくしてください、と言い切りま

す。本当の安心は、一切の不安を神さまにお預けることです。神は、ご自分に打ち明けつつづける者のために、必ず万事が益となるよう共に働いてくださるでしょう。

不安の一つ一つを、安心して打ち明けられる神さまを知っている人は、幸いな人であります。

友よ、何事も、信頼と感謝をもって、神に打ち明け祈ろう。その時、人知を超えた神の平安と勇気と希望とが、あなたの心と思いとに与えられるでしょう。



人生には意味がある

松下昌義

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。
どんなことにも感謝しなさい。

—テサロニケの信徒への手紙Ⅰ五章十六節—

何時も喜び、絶えず祈り、どんなことにも感謝
出来る人は幸いな人です。でも、「そんなことは
できません」と、私たちは思います。たしかにそ
のとおりです。が、ここでもう一度、喜びとは何
か。楽しみとは何か。祈りとはなにか。というこ
とを考えてみてはどうでしょう。

私たちの喜びも感謝も祈りも年齢によって違っ
てきます。子供の頃の喜びは、大人になると喜び
ではなくなります。さらに歳をとって来ると壮年
の時の喜びも、空しくなってしまうことがありま
す。更に病氣となり、死が身近に感ずるような状
態になれば、ますます喜びは消えて無くなってい
まいます。そして、あの時の喜びは何だったの
だろうか、と思うようになります。ひよっとすると、
そんな喜びを、私たちは追っかけているのかもしれ
ません。

ならば、いつまでも消えて無くならない喜び
と云うのは、どこから生まれてくるのでしょうか。
それを見つけて出すのはとても難しいことです。で
も喜びの正体を知れば、誰でもそれを得る事がで
きると思います。それは、「喜び」というものが

何処かにあるのではなく、自分の内に生まれて来
るものだという事です。どうすればよいのでし
うか。

いつまでも消えない喜びが自分の内に生まれて
来るための秘訣は、自分が生きていることの意味
に気づく事ではないでしょうか。

私たちは誰も、自分で、自分が生きている意味
を知ることにはできません。自分を他人と比べて見
ると多くの場合、自分が惨めに思えます。自分の
人生に意味があり、優れた価値があるなどとは思
えなくなります。自分は居ても居なくても同じで、
自分の代わりをする人間は沢山いるように見え、
周囲の目がそのように言っているように感じて
しまいます。自分は、わずかな楽しみを得てセウ
セウと働いているだけだと考えてしまいます。

だが、それは大いなる誤解です。「お前はかけ
がえのない者、お前の人生は価値あるもの、お前
はこよなく愛され、尊ばれている者、お前の人生
を喜び祝福する」と言うお方がいらっしやるので
す。それは、あなたを、この世に送りだして下さっ
た神さまです。

私たちは自分で生きているのではなく、神さまに
生かされて来た者、生かされて行く者なのです。
このように素晴らしく、有り難い自分に気づくこ
とが、自分の人生の意味を知ることなのです。そ
の時、感謝と喜びと祈りとが自分の内に生まれて
来るでしょう。

悪魔の働き

松下昌義

身を慎んで目を覚ましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたける獅子のように、だれかを食い尽くそうと探しまわっています。信仰にしっかりと踏みとどまって、悪魔に抵抗しなさい。

—ペテロの手紙一 五章八節以下—

宗教は、目に見えない世界のことであり、信仰は、目に見えない世界に目を注ぐことです。

目に見える世界ばかりに思いを向け、そこで喜んで悲しんだり、怒ったり争ったりして日々過ごしているのが私たちです。

しかし、目に見える世界と同時に、目に見えない世界の働きがあることを知っているのが信仰の人です。

× ×
聖書は目に見えない世界から目に見えるこの世を見て、大切な事を私たちに告げています。冒頭の聖書の言葉もその一つです。

あなたがたの敵である悪魔が、ほえたける獅子のように、だれかを食い尽くそうと探しまわっている。

聖書が語る「悪魔」とは、神を見る目を人から奪い取り、この世の欲にだけに人を縛りつけておこうとする働きのことです。ですから「悪魔」とは、神に敵対するものことです。

× ×
神を見失った人の世は、傲慢と偽善、欲と争い、利己主義と独善がはびこり、謙虚と愛、平和と安心が消えてしまい、自滅していく世となります。これこそ、まさに悪魔の仕業だと言えましょう。

× ×
目に見えない悪魔は、人の心にとり入り知らぬ間に、その人を攪乱してしまします。また悪魔は天使や正義の顔をして人に近づくと使徒パウロは警告し、さらに、次のように教えています。

私たちの戦いは、血肉を備えた者を相手にしているのではなく、支配と権威、暗闇の世界の支配者、天にいる悪の諸霊を相手にするものです。 —エフェソ 六章十節以下—

目に見えない世界を聖書を通し、信仰の目を凝らして見るとき、この世だけ見ている者には見えない、もう一つの現実を見ることが出来ます。謙虚な心で神を仰ぎ「試みに会わず悪より救い出し給え」と祈りつつ賢明に日々の務めを果してまいりたいと願います。



行いの大切さ

松下昌義

御言葉を行う人になりなさい。自分を欺いて、聞くだけで終わる者になってはいけません。

—ヤコブの手紙一章二十二節—

日々の行いが、その人の生き方や考え方を造ります。例えば、怠惰な行いをしていると、その人は怠惰な人間になってしまいます。規則正しい行いをしていると、その人はめりめりのある人柄になります。つまり、「習い（日々の行い）が性（人柄、性格、生き方、考え方）となる」のです。

身体の健康を保つためには、それに相応しい行いをしなくてはならないように、私たちの精神や心、または靈性を健康に保つためには、それに相応しい行いが必要です。

教会の礼拝に参加し、その礼典と儀式とに参加することは、自分の心や精神、靈性を養い育てるのに最も相応しい行いでありませぬ。

×

行いには、必ず形がともないませぬ。手を合わす行いは、手を合わす形に自分なることです。そ

して、その形に自分なりますと、その形に相応しい自分に変わっていきます。それが証拠に、正装して外出すれば、一時とはいえ、形に相応しい自分になります。このように行いと形は、自分を造りあげていくための大切な方法なのです。

×

ただ、思うだけ、考えだけで、それに相応しい行いと、形を造らなければ、その思いも考えも現実のものとはならないでしょう。

×

行うということは、ものごとを自分の五感によって感じ知ることです。目をおし、耳をおし、鼻をおし、口をおし、触れることをとおして心身に染み込ませる事でありませぬ。このように行うことは私たちにとって、とてもたいせつなことだと言えませぬ。

×

教会の礼拝に参加して祈り、賛美し聖書の言葉に耳を傾け、その雰囲気自分に置くという行いは、心と精神、そして靈性の健康な養いに、決定的な影響をあたえます。

思うだけ、考えるだけで、実際に行わず、自分そのように形造らないなら、人は決して変わる事はないでしょう。



いつも共に 居て下さる方

松下昌義

信仰の創始者また完成者であるイエスを
見つめながら走ろうではありませんか。

―ヘブル人への手紙十二章二節以下―

人は自分の利害または主張によって離合集散し
ます。ペテロはイエスが最も困っているとき、共
に居なければと思いつつも、イエスを捨てて逃げ
て行きました。イスカリオテのユダは自分の主義
主張にそわないイエスを見て、最後にイエスを敵
の手に売り渡してしまいました。その結果ペテロ
は自分の弱さに泣き、ユダは自分の行ったことの
重大さに絶望し自殺しました。

互いに愛を誓い合った男女が、自分の勝手な思
いのゆえに、離別してしまうことは、今も昔も世
間の日常事です。

こうした出来事は、誰彼が悪いという事ではな
く、「共に居ること」の難しきということであり、
結局は「人間の悲しき性」ということになりました。
その「悲しき性」を突き詰めていけば「人間の利
己性」にたどり着くようです。

とすると、問題は、人間の利己性をどのように
乗り越えるか、という一点にたどりつきます。

わたしは世の終わりまで、いつもあなたがた
と共にいる。 ×

―マタイによる福音書二八章二〇節―
とイエスは言われました。「共にいる」とは只一緒に
居るといっただけでなく、喜びと悲しみを共にす
る一体のことを意味します。主義や主張や好き嫌
い、利害共感といったことを越えたところで一緒
ということです。でも、人はいつも人間の利己的
なレベルでしか一緒出来ないものです。それだか
らこそ、人間の争いは絶えないのでしょうか。

しかし、イエスは、きのうもきょうも、いつま
でも変わることもなく、いつもあなたと共にいる、
と申されます。イエスさまの御生涯を語る聖書は
そのことを語っています。このイエスの生きさま
は模範としてではなく、わたしたちの醜さをさら
け出し、同時に、わたしたちに希望を与えて下さ
います。 ×

人も自分も、世間も「うつろうはかなき世」に
あって、「きのうもきょうも、変わることもなく、
いつも共にいてくださるイエス」に出会う、そこ
に、今日を生きる希望と勇気とが与えられるので
す。



死も命の現れ

松 下 昌 義

この人たちは皆、信仰を抱いて死にました。約束されたものを手に入れませんでした。だが、はるかにそれを見て喜びの声をあげ、自分たちが地上ではよそ者であり、仮住まいの者であることを公にいいあらわしたのです。……神は、彼らのために都を準備されていたからです。

ヘブル人への手紙十一章十三節以下

この世で生きることだけが人生だと、思っているらっしゃるなら、それはお間違いです。人の命の営みとしての人生は、この世だけではなく、姿を変えて永く続いて行きます。つまり、肉体に於いて現れる命は、霊体としての命に変わってその営みを続けていくのです。このような命の秘密をわたしたちは、日常の自然において既に見て、知っているはずで、一粒の種で現されている命はやがて、美しい花や大きな樹の姿で、その命を現すようになります。お母さんの子宮の中で命していた「私」が、赤子というかたちで命し、そして幼年、少年、青年、壮年、老年というかたちで刻々と命を現しつつ、やがて死という姿で命の移り

変わりをして行きます。その意味で、「死ぬ」ということも命の営みのひとつの姿なのです。命の営みは増しもせず、減りもしないのです。

しかし、この世だけが「私」の命の営みのすべてだと思いをしている人は、いつまでも花の壮年期でいることを命の最善だと考えてしまいます。そして、老年期を悲しみ、死を命の終わりと思い込むのです。

命の営みは本来、栄光への道を進んで行くものです。神さまが備え与えて下さった命はそのような有り難いものなのです。この命の偉大さと有り難さを信仰に於いてよく知っていた方達が、冒頭に紹介した「信仰の人達」であります。再度その聖書の言葉を読んでみましょう。

私たちが、与えられた偉大な命の営みを、ただこの世を生きる事だけに、小さく狭め、次に移行していく命を汚し歪めて、命の恵みに逆らう生き方をこの世にするなら、神が備えて下さった栄光ある自分の命が、結果的にどうなるか、それは言わずもがな、であります。



霊の火を

消してはなりません

松下昌義

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい。これこそ、キリスト・イエスを通して、神があなた方に望んでおられることです。霊の火を消してはいけません。

テサロニケの信徒への手紙五章十六節

神を知り、神と交わることが出来るのは、あなたの内の霊です。霊は、憎しみより愛を、いさかいよりゆるしを、分裂より一致を、闇より光を、疑いより信じることを願っています。

霊の火を消してはなりません。

わたしたちは、自分を置く場所に気をつけま

よう。善を行う人々の中にいれば、気づかないう

ちに善を行うことに励ましを受けます。虚しい噂

話、独りよがりの批判や攻撃する言葉の中にいる

と、気づかぬうちに霊の火は消え去り、闇がその

人を支配してしまいます。あなたの内の霊の火を

消してはなりません。

自分の内に働く霊の火を光り輝かせましょう。

霊の願いは、あなたがいつも神と共に歩むことです。小さなことにも喜びを見いだし、感謝を忘れず、絶えず祈りつつ日々をすごすなら、霊はますます光り輝き、あなたの人生は落ちついた幸いで満たされるでしょう。

感謝の礼拝をおろそかにしてはなりません。見えない手で支え、ゆるし、導いていくくださる神を賛美する礼拝をおろそかにしてはなりません。

礼拝こそ自分の霊を養う有効な方法です。

霊の火を消してはなりません。

霊が成長するとき、慰められる人から慰めを与

える人に変えられます。愛される人から愛する人

に変えられます。そして理解される人から理解す

る人とされ、人生に喜びと平安とがますます増し

加えられるでしょう。

あなたの霊の火を消してはなりません。肉体は

無くなります。しかし、磨かれた霊は、この世を

去っても、歓喜の光につつまれ、神の祝福のもと

でますます浄化されて行くでしょう。

霊の火を消してはなりません。

人間となる

松下昌義

身を慎んで目を覚ましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたける獅子のように、だれかを食い尽くそうと探し回っています。信仰にしっかり踏みとどまって悪魔に抵抗しなさい。

ペトロの手紙Ⅰ五章8節以下

悪魔とは誘惑者のことです。人が人らしく生きようとするその思いを攪乱し、人を人らしくからぬ生き方、考え方に誘惑する働きをするもの、それが悪魔です。

昔の歌に、「人多き人のなかにも人ぞなき、人となれ人、人となせ人」

たしかに、目鼻を備えた人は多くいるが、人らしい人はいない。人よ たがいに人らしくなり、また、人となれるように努力し、感化し思いやっけてゆきたいものだ。と言うのが、この歌のこころでしょう。

×

×

では、人らしい人とはどう言う人のことでしょうか。答えはいろいろありますが、聖書が示すそれは、一口に言えば、神に手を合わせ、感

謝する生き方が出来る人、だと言えます。

×

×

どの人も 目に見えない大いなる命に生かされている者です。この事に気づいた人は、感謝することが出来る人となります。感謝と謙虚、つまり神にたいする畏敬の念の表れが、手を合わす姿なのです。

×

×

人間の一番美しい姿は、黙して神に手を合わせている姿です。そこからは、愛が生まれ、喜びと平安とが満ちて来ます。それにひきかえ、最も醜い姿は傲慢です。そこからは憎しみと争いとが生まれて来るだけです。

×

×

この世には、目に見えないさまざまな勢力が闊歩しています。その中で最も恐ろしい誘惑者は、人の心から感謝と謙虚の思い、神さまに対する畏敬の念を奪い、この世の思いに縛りつけようとする悪魔の働きです。

死んで棺桶に入れられ、そこで他人様から手を合わさせてもらうような、生き方をしてはならないと思います。生きているあいだに、自分で手を合わす、人間らしさを持ちたいと願います。



万事が益となる

松下昌義

神を愛するものたち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように、共に働くということを、わたしたちは知っています。

—ローマの信徒への手紙八章二八節—

神を愛するとは、神の積極的肯定的な命のたぎりに目覚めることです。また、神の愛の御手が生活のあらゆるところで働いていることを信じることです。

ひとたびこの真理に目覚め歩みだすとき、力と希望が与えられ、人生は明るくなるでしょう。また、どのような敵意をもった力であっても、理不尽な苦しみであっても、そのすべてが自分を益するための神の配慮だということに気づくようになるでしょう。

ただ、成り行きにまかせてはいけません。独りよがりの思いや利己心で、自分の欲望が満たされることを願う信じてはいけません。

善く生かそうとする神の御手が、自分の生活のいたる所に働いており、万事が益となるようにしてください。あらゆる事柄に

積極的肯定的に関わろう。

「わたしの業が、すべての人々にも益し、わたしの周囲にいる人達に幸いをもたらし、神を賛美する命の充実を与える助けとなる」という確信を、朝のはじめに、日中に、夜、眠る前に言葉をもって確認するならば、神は必ずその通りの者とならせてくださる。

一切の疑念、偏見、嫌悪の想念を捨てよ。これらの想念に支配される者は、自分自身が生じる毒業によって、自分が被害者になる。

いつも人々の平安を祈ろう。その人がそれに相応しく受ければ、あなたの願う平安はその人に満たされ、あなたは喜びで満たされる。しかし、その人が相応しく受けなければ、その平安はあなたの所に必ず返って来て倍の祝福を受ける。

たえず祈り、すべてのことに感謝し、いつも喜んでいよう。

神を愛する者たちに対して万事が益となるよう、神の見えざる御手が働いている。そのために自分が召されたことをひとときも忘れてはなりません。



人間であることと 有り難さと責任

松 下 昌 義

御国が来ますように。御心が行われますように、天におけるように地の上にも。

— マタイによる福音書六章十節 —

地上にあるすべてのものは、それぞれ懸命に生きています。植物も動物も人間も。そして土や石なえも。

生きていくということは、存在しているということ。そして、それぞれが存在しているのはそのものの意思でなく、神さまの御心によって、その姿と形を与えられて存在しているのです。ですから、「在る」ということ、「生きる」ということは、理屈ぬきで有り難い出来事です。

× × ×
「生きる」が許され「生かされている」ことを自覚出来るのは人間だけです。自覚するとは、自分でよく考え知っていることです。植物や動物はただ、自分の生きることに忠実に命じます。石などに於いては、置かれたところで、その形を保ったままに在るだけです。しかし、人間は違います。

人間は自分について考え、過去や現在や未来の自分に思いを巡らすことが出来ます。だからこそ人間は悩み喜び不安や希望を持つことが出来るのです。人間は自分の生き方を選択決定出来る命を与えられている者です。人間であるとは、なんと有り難いことでしょうか。

× × ×
すべてがそれなりの姿形で存在する事を許され

ていることは、有り難い神の御心です。でも、その御心を自覚出来るように創られているのは人間だけです。

× × ×
人間だけが、自分の生きることに自覚を持つ存在であるということは、そのように人間を在らしめられた「神の御心」に責任を負うている者だということでしょう。

人間であることの印は、神の御心を知る事が出来ることです。しかし、自分の生きさまを反省するとき、神の御心を自覚して日々生きていくといえませんが、ましてや、広く人間の社会を見ると、神の御心を自覚的に知って人間は社会を作っているように見えません。

× × ×
神の御心に感謝する個人は少なく、神の御心に適った社会を作ろうとする人達はいません。個人も社会も人間の利己的計算と感情とが最優先され修羅場と化しています。

× × ×
でも、誰もそれで満足していません。心の内では個人も社会も幸いでありたいと願っています。だからこそ、イエスさまは教えて下さいます。

「あなたは、どこにいても、どのような時にも喜びと希望とをもって生いなさい。神は、万物がそのように生ることが出来るように、創造されたのです。この有り難い「神の御心」がすべての根っこに命じていますよ。ですから、御国（神の御支配）に目覚めるように祈りなさい。あなたの足下には神の御愛が無条件に躍動しています。安心しなさい」と。



食物は「賜物」

松下昌義

わたしたちの必要な糧を今日あたえてください。

— マタイによる福音書第六章十一節 —

私たちは他の動物と同じように食物を摂らなければ、肉体を維持できません。食物がなければ私たちの肉体は死んでしまうのです。私たちにとつて「食物」とはそういうものなのです。

若いころ、それは戦後の日本がとても貧しかった頃、病院の開けっ広げの診察室で、受診者が列をつくって順番に、皆の目の前で診察を受けていました。私もそこに並んでいたのですが、私の前の中年男性が診察を受ける番が来ました。椅子に座った男性、弱々しい声で「先生、食欲がないのです」と医師に訴えました。それを聞くとや老医師「何を言うか。食事をしなければ、死んでしまうのだ。好きも嫌いもない。無理にでも食べ物を口に入れなさい」と恫喝しました。食べ物人間にとって基本的に趣味趣向で摂るものではなく、生きる為に摂らなければならない物だと、そのとき強く思いました。その意味で、「わたしたちの必要な食物を今日与えてください」とう祈りは、切実な祈りなのです。

すべての生きものは、生きるためにそれぞれの摂取行動があります。私たち人間の摂取行動はその昔に「つくって食べる」という形になりました。「つくって食べる」とは農業を行うと言うことで

す。とすると、農業を行うということは、その大方が自然の天候に左右される業です。雨か降らなければ水が不足して農業は成り立ちません。大寒波が来れば作物は出来ません。火山が爆発して大量の灰が降ったり、溶岩や泥流が襲って来ればすべては無くなります。食物の収穫は人間の業を越えている自然の恵みにより成り立っているのだということを忘れてはなりません。

今日、お金さえあれば、何でも自由に手に入れる事が出来、グルメとか言っていてむやみに美食を楽しんでいる今の飽食日本人は、「食物」について根本的な大間違いを犯しているのです。

「食物」は天(神)から与えられる「賜物」なのです。さらに、心身が健康であるからこそ「食べる」事ができる事も忘れてはなりません。

「食物がある」ということは、根本的にはお金があるということとは関係のないことです。太陽が照りつける砂漠の真ん中で、トラックいっぱいの一万円札を持っていても、それは生きることになんの関係も無いことです。それより一滴の天からの水の方が尊く有り難いのです。

「食物」は神さまからの「賜物」です。さらに食物を食べる事ができる「健康な身体」を得ていることも神様からの「賜物」です。私たちは万感のおもいをもって、

わたしたちの必要な糧(食物)をきょう与えて下さい。
とお祈りしたいと願います。



あなたの負い目

松下昌義

わたしたちの負い目を赦してください。
わたしたちも自分に負い目のある人を赦しま
したように。

— マタイによる福音書十六章十一節 —

だれでも自分の心の内に暗いものを引きずって生
きています。それを自分の心の深くに秘めたままで
この世を去って行く。これも人生の一面なのでしょ
うか。

忘れていたから語らないのではなく、語れないの
で内に秘めているのです。語っても赦されないから
語らない。語って赦されると思うことだけを人は語
るのかもしれない。

語らないことの中には、深く悔いていることがあ
るでしょう。苦い思いで、申しわけないと思うこと。
語ってしまえば今の人間関係がつぶれてしまうよう
なこと。嘘を隠して生きている自分。その内容はさ
まざまです。語れないから、なにか不安で、なにか
息苦しい。それは、いつか報いとして自分が引受け
なければならぬと予感している「負い目」です。

人生の哀しさの一つは、どの人も自分の心の深く
に「負い目」を秘めて生きていることです。それだ
からこそ、イエスは「わたしの負い目を赦してくだ
さい」と祈ることを教えて下さったのです。ルカに
よる福音書の方では「わたしたちの罪を赦してくだ
さい」とあります。なんと有り難い祈りでしょうか。

だれも知らない。だれも気づかない。と思ってい
ても神はすべてを知っておられます。だれにも語ら
なくても神はすべてを見、すべてを聞き、すべてを
感じておられます。それは親がわが子を見る眼差し
気配りの慈しみです。それほどの有り難い眼差しが
どの人にも注がれています。

わたしが神を見るのではなく、神に見つめられて
ている者が私なのです。それは「あなたの罪は赦さ
れた。安心して行きなさい」というイエスの語りか
けです。

他人を赦すことは、とても難しいことです。でも
自分が赦されているということに気づくなら、他人
も赦そうという思いが生まれてきます。

イエスは、「人を赦しなさい」とは教えられませ
ん。それは第二のことです。第一のことは「あなた
は赦されます」という神の呼びかけです。

人が人を赦す、ということもあります。しかしそ
れだけでは十分ではありません。本当に自分の人生
で負いきれないものは、どんな人にも負いきれませ
ん。でも、神には負いきれるのです。それが「あな
たの罪は赦された」という宣言です。

神に赦されていることを知っている人生には希望
と安心があります。喜びと感謝を伴って生きる勇気
が生まれて来ます。そのとき、「わたしたちも自分
に負い目のある人を赦しましたように」という祈り
の意味が深く理解出来るようになるでしょう。



この世を 良く生きる秘訣

松下昌義

貧しい人に援助の手をさしのべよ。そうすれば、お前は豊かに祝福される。

生きとし生けるもの、すべてに恵みをほどこせ。また、死者にも思いやりを示せ。

泣く人と共に泣き、悲しむ人と共に悲しめ。病人を見舞うのをためらうな。それによつて、お前は愛されるようになる。

何事をなすにも、お前の人生の終わりを心に留めよ。そうすれば、決して罪を犯すことはない。

—旧約聖書統編

シラ書（集会の書）七章三二節以下

自分の靈魂をゆたかに育てるような生活ができれば、その人は最も良い人生を過ごしている者です。

この世の命は必ず終わります。いつまでも若さはつづきません。人は間もなく老い衰えこの世から消え去る者です。しかし、私たちの靈魂は生きつづけます。

この世でその人がどの様に生きたかというその生きざまに相応しく人は死に、それに相応しく靈魂は生きつづけます。これは、人生の秘儀です。しかしそれに気づいて生きる人はまことにわずかです。

ですから、シラの書は「何事をなすにも、お前の人生の終わりを心に留めよ」と私たちに注意をうながすのです。

×
自分の靈魂を豊かに養う方法はこの世での生き方

にあります。自分に与えられている能力と才能、仕事と労苦を、ただ自分の楽しみのためだけに用いる人は、神がその人に与えられた人生に相応しくありません。与えられた能力と才能、仕事と労苦とを神の愛の下で十分に用いる事です。人の評価だけを気にしてなされる善行は必ず失望に終わります。人の心は簡単に変わります。その人の心のやさしさ、忍耐と寛容と寛大さと自己犠牲の奉仕など、それらを正しく見ておられるのは神だけです。そして、神はその人の靈魂をゆたかに富まして、永遠に祝福し守られるでしょう。

×
神は、先に生きた人々がその労苦によって作りだし、残して行った多くのものを受けた人が、更にそれを継承発展して生きるように、この世を設けられました。それは、生きている者が先達の労苦を覚えるためです。祖父母がいて親があり、そして子があり、さらに孫たちにすべては引き継がれていきます。人生は自分だけのものでも、今だけのものでもありません。死者は生者に、生者は死者に繋がっています。一生きとし生けるもの、すべてに恵みを施せ。また死者にも思いやりを示せ。」と言うシラの書の勧めに深く耳を傾けましょう。

×
この世はあの世に繋がりが、生者は死者に繋がっています。神はそのように人が生きることを定めて下さいました。この世を良く生きるとは、このような神の大決定を賛美しつつ、先達に深く思いを向け、こころ優しく互い助け合って生きて行くことです。そのように生きる人を神は必ず祝福されるでしょう。

悩むな、苦しむな

松下昌義

明日のことを思い悩むな。明日のことは明日みずからが思い悩む。その日の苦勞は、その日だけで十分である。

マタイによる福音書第六章三四節

私たちは明日といわず明後日、明々後日、一年先のことで悩む者です。また、過去の自分の判断や行いについて後悔し悩む者です。しかし、イエスは、「明日のことを思い悩むな。明日は明日自身が悩み、一日の苦勞は、その日だけで十分だ」と言われる。しかし私達は「そのような、のん気なことは言っておれない。現実には厳しいのだ！」と反論する。

× ×

思い悩むな、と言われても悩む者、これが人間です。鳥や魚や犬や猫は明日のことで悩みません。

私たちは悩む者。否、悩む事が出来る者なのです。これは神による大決定です。悩むことは人間のしるしです。それを通して人生の深み、人間の深みへと導かれます。悩みはただ悩みのためにあるのではなく、悩みを通して、生きる真実に気づくことが大切です。

自分が必要だと思ふことと、本当に自分にとって必要なことは違います。悩んで良かった、苦勞して良かった、生きていて良かった、としみじみ、つくづく思えるような、感謝出来るような者へと私たちを導いて行くような事こそ、本当に自分にとって必要なことなのです。

明日についての計画をたてるな、願いを持つな、

と云うのではありません。私たちは自分で自分の生きる方向を決定できる部分と、出来ない部分とを持つことが出来るように神に造られ、この世に送りだされて来た者です。ですから、悩むことも神の手の中での出来事です。大切なのは、悩まなくなることではなく、自分をどこに置いて苦勞するか、悩むのかということなのです。

× ×

自分の思いどおりにならないからといって、文句を言い、誰かを批判し、過去の自分の選択判断を後悔することは、本当の悩みではなくただの愚痴です。神の御心になかった悲しみは、取り消される。このとのない救いに通じる悔い改めを生じさせ、世の悲しみは死をもたらず。

コリントの徒への手紙Ⅱ第六章十節

と使徒パウロは言いました。今の悩みや苦しみはその時は自分にとって苦しくても、神が必要として与えられる苦しみである、という神の計画を、悩みや苦しみの中で信じ、且つ気づくことができるなら自分の立場では悩みであっても、神の立場から自分を見れば、それは悩まなくてはならない悩みでないことを知るのです。そのことを「悩むな」とイエスは言われる。そして「明日」は神の計画の中に在るのだから「明日自身に」まかしなさいと言われる。その日苦勞したことも神の計画にゆだねなさいと言われる。

結局、悩みや苦しみの現実の姿だけを見るのではなく、神の御意志が、苦しみ悩みの根っこに働いていることを、信仰により確信していきたいと思えます。「あなたの神は、これらのものがみなあなたがたに必要なことを「存知」なのですから。



つづけること

松下昌義

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。
どんなことにも感謝しなさい。

テサロニケの信徒への手紙Ⅱ

五章十六節以下

「習い性となる」ということわざがあります。いつもそのようにしていると、それが生まれながらの性質と同じものになる、という意味です。

いつもそのようにする事を「習慣」と言います。

「人は稟育(すだち)を肝心にすべき事也。習い性となるが如し」と中国の古典にあるようですが、これも、その人が幼いときからどのような育て方つまり、どのように習慣づけられて親に育てられたかが、その人の人格の形成にとって最も肝心なことだ、というのです。

×

×

私たちは、今の自分を自分でつくりあげたように思っています。考えてみますと、今の自分のほとんどが親から、または親の親から、つまり先祖から伝わる遺伝子をもっての自分なのです。さらに加えて、親の育て方によって身につけた習慣を引きずっている者が今の自分でもあります。さらにその他にも、自分を置いてきたその土地の自然や文化や伝統といった風土による影響等もあります。風土とは、その人の生活や考え方のかたちを決定づける場のことです。とにかく、今の自

分のほとんどは、自分自身のものではないということです。ですから、人が人を知るといふ作業は、簡単なことではなく、たとえ専門家といわれる精神科医でも、ひよっとすると充分に分からないのではないかと思えます。

×

×

でも、私たちは自分で自分を作りあげる可能性をもっています。それは、人間が神様からいただいた特別な賜物です。その賜物とは、自分で自分の生き方、心身の在り方を方向づけ決定決断出来ることです。そのための方法の大切な一つが「いつも」「絶えず」「どんなことにも」それを継続し習慣とすることです。

×

×

聖書は「いつも喜んでいなさい」「絶えず祈りなさい」「どんなことにも感謝しなさい」と勧められています。これはたてまえとしての教えではありません。新しい自分を見だし、新しい自分を掘り起こして行く人生の一大作業なのです。

いつも喜び、絶えず祈り、どんなことにも感謝していると、そこから、今まで気づかず、知らなかった新しい命の世界が見えてくるのです。それだけでは有りません。新しい自分が生まれ出てくるのです。

×

×

イエスは言われました。「求めつづけなさい。そうすれば与えられる。門をたたきつづけなさい、そうすれば開かれる。……」

——マタイによる福音書七章七節以下

花をよく見なさい

松下昌義

野の花がどのように育つか注意してみなさい。

—マタイによる福音書六章二八節以下—

この世のものは、無言のうちに必要なことを語っています。それを聞くことができれば、それらが「ただの物にすぎない」と考えていた「思いの粹」から抜け出すことができるでしょう。

自分の周囲にあるすべての物が「ただの物質」でなく、「命の芯」を無言のうちに示していることに気づくなら、その人の世界は拡大し、その人の人生は深さを増し、人生や世界を見る目が一変するでしょう。

この世にあるものは命の芯の「象徴」（シンボル）です。シンボルとは、言葉や理屈で表現し伝える事ができない内容を、人の心に悟らせる働きをするものです。

例えば、黙って咲いている一輪の花を見て、人は感動し、喜びを与えられ、悲しみを癒されるということが起こります。また、散りゆく花を見て、人生の無常を感じ、それまでの生き方を転換する奇縁とした人がいます。また、流れる川を観て、「人生はかくの如し」と悟り、さらに、流れる川に触れ、「世界は流転する」と悟った古代ギリ

リシャの哲人達がいます。さらに、旧約聖書の信仰人は次のように詩いあげました。

もろもろの天は神の栄光をあらわし、
大空はその御手のわざを示す。

この日、言葉をかの日に伝え、
さの夜、知識をかの夜におくる。

語らず言わず、その声聞こえざるに
その響きは全地にあまねく、

その言葉は地のはてにまでおよぶ。
—旧約聖書・詩編十九編—

「野の花を注意して見なさい」とイエスは言われた。「注意して見る」とは、そのものの命を悟りなさい、ということ。花は、ただの花だ、と思い込んでいた世界が破れて、命の芯が見えるようになりますよ」とイエスは言われます。

見えてくる深い命の世界とはどんな世界なのでしょう。それは「安心の世界」です。「人生には、いろいろと苦しいことがある。辛いことがある。しかしそれでも、生きて行ける。生かせていただける、だから、生きて行こう」という命の力を、人の心に湧きあがらせてくれる、それが「命の芯」です。それは神の命のたぎりです。

「野の花を注意して見なさい」「空の鳥をよく見なさい」と同時に「思い悩むな。」とイエスは言われます。花を咲かせ、鳥を養っていただくさるではないか、まして人間においては、と言われる。まさに「一輪の花に永遠にほろびない命のよろこびが、悔いなく、そこに輝いている。」



死と死後の裁きを考ふる

松下昌義

人間にはただ一度死ぬことと、その後には裁きを受けることが定まっている。

—ヘブライ人への手紙九章二七節—

西洋の中世においても、東洋においても、勿論日本においても近代以前の人々は、自分の死の影と同時に死後の裁きや生まれ変わって来る再生の思いを引きずって生きていました。

「嘘をつくとく、死んでから地獄の閻魔さんに舌を抜かれますよ」などと、わたしの幼い頃でさえお婆さんから言われたものです。また、大きな寺の縁日には、地獄や極楽の絵巻を参詣する人達に見せる催しものが、参道の屋台店に混じって行われており、子供達も親に連れられておそろおそろ見物しました。また、源信の「往生要集」を参考にした、美女や位の高い人が死に九つの段階を経てその体が腐っていく姿を描いた「九相図」というのがあって、人々が常にそれを見る機会がありました。このようなものは、ヨーロッパにおいてもおおくあり、ミケランジエロが描いた「最後の審判」の絵などは有名です。

しかし、近代以降の時代、特に今日の時代には、人間の死や死後の裁きについて、人々はほとんど考えなくなってしまうました。それは科学技術万

能の時代、したがって死や死後の思想の消失によるのでしよう。そして人々は、目の前の欲望の満足のみ、この世だけの幸福のみが最大の関心事となってしまうたのです。

それにしても、人間が自分の死と死後の裁きを人生に於いて、全く考えなくなってしまうたことは、実は、この世の自分の人生を人間として良く生きる裏付けを無くしてしまつたのと同じことだと思ひます。

自分の死を知らないで、自分の生を本当に知ることには出来ないのではないか。自分の死後のことを考えないで、自分の生を充実したものとする事は出来ないのではないか、と思ひます。

人間は一度死ぬことと、その後、裁きを受けることが定まっている。

という聖書の提示は、ただの脅迫的な言葉ではなく、今生きているということ、この世で生きて行くことに、緊張感と危機感とを人間に与え、わたしに与えられた、一度だけの人生を真剣に生きて行こうという思ひを、生ましめるのではないかと思ふのです。

今の時代は、何か生きて行くのに息苦しきを感じさせます。欲望だけが膨れ上がり、その一方、欲望が満たされない不満も膨れあがって、出口の無い不安と焦りとが人々の内にあります。もう一度、自分の死と死後を見つめてみるなら、あなたの生き方は変わるでしよう。

人生は

成熟への道のり

松下昌義

いづれにせよ、わたしたちは到達したところに基づいて進むべきです。

—ファイリピの信徒への手紙三章一六節—

万物は成熟へ向かって進むよう、神に造られています。成熟とはそのものが十分に熟すことだとするなら、それは、そのものが本来にそれらしく成る、と言うことでしょう。

例えば、果物が成熟するとは、その果物らしく熟することです。花が成熟（成長）するとは、その花らしく咲く事でしょう。

しかし、なにごとくも、一気に成熟せず、その時の姿・形を経て、そのものらしく成熟します。

私たちの求道も同じです。どの人にも、その時に到達した処があり、本来に成熟する人は、そこで十分に留まります。しかし、途中で挫折してしまう人は、到達した処に不満を覚え、又は成熟して分かったようになりなってしまう者です。

誰でも「また、同じことを！」「分かっているのに！」—と—思ったとたん、成熟への道は断たれます。

到達した処で何度も何度も同じことを聞いたり見たりしているなら、そのうちに次の新しい世界

が開けてきて、成熟に向かつて一歩近づいた処に、知らぬ間に達しているのです。

万物が成熟していくためには、神が備えてくださった「命の順序」があります。それは神が備えられた大決定です。イエスはその順序を次のような例えで提示なさいました。

神の恵みの御支配は次のようなものである。人が土に種を蒔いて、夜昼、寝起きしているうちに、種は芽を出し成長するが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。土はひとりでに実を結ばせるのであり、まず茎、次に穂、そしてその穂には豊かな実ができる。実が熟すと、早速、鎌を入れる。収穫の時が来たからである。

—マタイによる福音書四章二六節以下—

神の大決定に基づいてわたしたちの心も成熟して行きます。それが人生の道のりです。

一気に成熟は出来ません。自分の到達した処に慌てず、迷わず、じっくりと留まり求道をつづけるなら、必ず成熟へ一歩近づいていくでしょう。成熟の実を知らぬままで、種や、芽や、茎や、穂の段階で、実ったと思う者は傲慢（ごうまん）です。

いづれにせよ、わたしたちは到達したところに基づき進むなら、やがて、この世を超えた永遠の土壌に歓喜の花を咲かせる種子としてくださるでしょう。



人間のこころの世界 は深淵

松下昌義

今日、あなたたちが神の声を聞くなら、神に反抗したときのように、心をかたくなにしてはならない。

ヘブライ人への手紙三章十五節

人の「こころ」というものは底無しの深淵のようであって、だれにもそれは「わからない」のだと思う。自分自身のこころの何であるかもわからないのに、ましてや自分以外の人のこころの深みなど、わかるはずがないと思います。このことを、一番よく知っているのが、こころの分析をする専門家たちではないでしょうか。

私たちの肉体が、複雑に構成されているように、こころの世界は、それよりも、もっと複雑で深淵、かつ広大なのでしょう。ですから、人のこころのことを、簡単に分かったような気になって、「その原因は〇〇ですよ」などと決めつけてはならないと思うのです。

こころの世界はひよっとすると、神さまや天使から悪魔や悪霊までの広がりや深さに及んでいくのかも知れません。その証拠に人は、あるときには神さまや天使のようであり、あるときは悪魔や悪霊に憑りつかれたような思いを持ち、実際に行動することがあります。神や天使、悪魔や悪霊

などと言うと、古代的なものあやしげな迷信のようですが、心の明るさと闇の部分とを、かいま見るとき、その古代的で、ものあやしげな表現がもっとも、こころの世界の有り様を暗示しているのかも知れませぬ。

聖書にはこころの世界に関わる恐ろしい現実について語っている文章があります。

身を慎んで目を覚ましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたける獅子のように、だれかを食い尽くそうとして捜し回っています。

ペテロの手紙五章八節
神とか天使、とりわけ悪魔とか悪霊などという言葉は、軽々しく口にするものではないでしょう。だれかを、悪魔とか悪霊憑のようになってしまう、社会を混乱させてしまうことになりかねないからです。しかし、先程も言ったように、人間の肉体とこころの世界をより一層深く見つめることが求められており、また、私たち一人一人が自分のこころの世界・精神世界を好奇的にはなく、真面目に大切に見つめ正しく管理する事が、強く求められているのが今日の人間状況ではないかと思えます。

「心をかたくなにしてはならない」と聖書は教えています。「かたくな」とはコチコチに固まってしまふことです。それは心の硬直であり、歪んだ状況、破壊された状態だと言えないでしょうか。人間が、神にこころを向けるということは、多くの現代人が考えているほど、軽いことではない内容を秘めているようです。

『人間本来無一物』

松下昌義

イエスは大声で叫ばれた。

父よ（神よ）わたしの霊を御手にゆだねます。

——マタイ福音書二三章四六節——

禪の方で「本来無一物」という言葉があります。

それは、人間はもともと裸で生まれ裸で死んで行く自分のものなど一つもなく、すべて神さまから頂いたもの、という意味です。今、自分のもの、と言いました、実は、その「自分というもの」も、神さまに頂いたものなのです。

とすると、本来、私というものも含めて、「私のもの」は無いのです。なのに、「わたし・わたし」と言い、さらに「わたしのもの・わたしのもの」と力んで生きているのが人間です。

× 「わたしなど無い」というのは理屈ではなく、本当のことです。では、現実にいる「このわたし」は一体、何なのか、と思います。答えは、とても簡単です。「今、現実に生きている自分は、神さまに生かされている者」だということです。

× とすると、人間「本来無一物」とは、すべては神さまのものであって、「わたしのもの」は何一つ無く、わたしの命の根元は神さまにあるので、自分で自分の命に思い煩うことは無いという意味です。

× この世に、この貌で生まれて来て生きていることすべてが、「わたし」を超えた神さまの命によるの

だという事実にあづくなら、自分の本当の拠り所、自分の人生に安心の土台を得たということであって神さまに自分の命を預けて、置かれた時と場で一生懸命に生きて行けるようになるのです。

× イエスさまは、十字架の苦しみの中から、「神さま、わたしの霊を御手におゆだねいたします」と叫ばれました。イエスさまにとって自分の本当の命のよりどころは自分ではなく、神さまだったのです。それは、自分のすべてが神さまのもの、だと言うことを知っておられたからです。

× この世で、自分を引っ提げて生きて行くことは、とても大変なことです。自分で自分の人生を背負って生きていくことは苦しくて辛くて、耐えることは出来ません。しかし、自分は本来無一物であり、自分は神さまのものだということに気づくなら、苦しくても生きられる。辛くても生きていこう。という希望と力が自分の命の深みから生じて来るのです。

× このように、自分の命の根っこに目覚めることを宗（こころ根）の教え、つまり宗教に目覚めると言います。ですから、○○教・××宗という特定の宗教に出会うことで、その人は宗教を知るのではなく人は生まれたその時から既に宗教的生を生きているのです。

× 思い悩むな。——今日は生えていて明日は畑に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装ってくださる。——思い悩むな。



そのおまじ

しておまじなわい

松下昌義

わたしの天の父(神)がお植えにならな
かった木は、すべて抜き取られてしまう。
そのままにしておきなさい。

— マタイ福音書一五章一三節 —

ある農夫が自分の畑に麦の種を蒔きました。芽が
出ると、蒔いたはずがない毒麦が出てきました。農
夫の一人が毒麦を抜いてしまいませんか、と言
うと、主人の農夫は「いや、毒麦を集めるとき、麦ま
で一緒に抜くかもしれない。刈り入れまで、両方と
も育つままにしておきなさい。刈り入れの時に先ず
毒麦を集め、焼くために束にし、麦の方は集めて倉
に入れなさい」と、刈り取る者に言い付けました。
というイエスのたとえ話が聖書にあります。(マタ
イによる福音書一三章二四節以下)

聖書は「神と人間」との関係を教えています。ど
の人も、目に見えない大いなる命である神により生
み育てられ、生かされている者です。ですから、イ
エスは神に畏敬の念をもって「お父さん」と呼びか
けました。

世の親達が我が子が善く育ち生きてくれることを
願っているように、神も、どの人も善く生きること
を願って、この地上に送りだしてくださったのです。
つまり、どの人も親に願われているのと同じように、
神に願われている者、願いをかけられて生かされて
いる、有り難い者なのであります。

子どもが親に願う前に、先ず親の願いが子どもに

注がれている。だから子どもは育ち生きることが出
来るのです。しかし、子どもは、親の心知らずに
自分勝手な事を言い、さまざまな屁理屈を並びたて
て逆らいます。しかし親は、子どもの様子を見て案
じながら、善く成長してくれることを待っています
神の思いも同じです。それが、「そのままにしてお
きなさい」ということです。

親と子どもとの関係は、神と人間との関係の反映
です。人が親になるということは、神の心を知るた
めにならせられるのであって、ただ漠然と親になっ
たのではありません。

子どもが親に逆らうのは、その子どもが一人前の
人間として生きて行くための、通らなくてはならな
い道でもあります。そうして一人前に成長した子ど
もは、必ず親に逆らった自分を省みて、愛と忍耐と
で成長を待っていてくれた親に感謝し、親を再確認
することで「まともな人間」になるのです。

問題は、逆らえばなしの人間になることです。又
親に全く無関心になってしまう人間になることです。

神への感謝も祈りも失い、自分の傲慢さをもって
生きる人間ほど不幸な者はいません。神への畏敬の
念を失い、自分の事にだけ関心を持ちつづけてきた
人間の「生き方のつけ」は、必ず支払わねばならず
現代という時代は、その「つけの支払請求書」が人
間の手元に来て、さまざま問題を起こし始めてい
るようにも思えます。蒔いた種はその者が刈り取る
ことになるのは自然の理なのでしょう。

神の大決定に生きる

松下昌義

あなたがたのうちだが、思い悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができようか。……思い悩むな。

「マタイによる福音書六章二五節以下」

何事にも時があり、天の下の出来事にはすべて定められた時があります。たとえば、生まれる時があり、死ぬ時があります。時が来なければ生まれず、その時が来なければ死ぬ事もできません。わたしたちは、限りのあるものです。自分で考え、自分で決断し、自分で行動する知恵と力とを持っていきます。ですから、人間は何事でも出来る者だ、自分は自由人だ、私の主人は私だ、と思いき、違いをしてしまいます。

しかし、よく考えてみますと、どの人も我が身の明日もわからないのです。ひょっとして、明日何らかの事情で死ぬかも知れません。次の瞬間何かが起こって、人生の計画が破壊されてしまうかも知れないのです。人が生きて行くのに、完全に確かな保証はどこにもありません。

米国のあの高層ビルで働いておられた人の誰もが、旅客機が飛び込んで来るとは思ってもいませんでした。あの島に住んでおいでになった方は火山が噴火して、島から非難しなければならなくなる事が、その時おこることは予想しておられませんでした。あの朝に突然、大地震が起こるとは

街に住む誰もが考えてはいませんでした。笑顔で送りだした愛する夫や親兄弟、息子達の船が潜水艦の操作ミスで轟沈してしまうことなど、全く予想もしていませんでした。その他様々な悲しい出来事が日々私たちの身の回りで起こっています。

自分の人生の主人は自分ではありません。人間には限界があります。一万八千二百五十日(五十年)経てば今いる人の半数はこの地上には居なくなります。筆者は人生を暗く、悲惨に且つ虚無的に思い語っているではありません。ただ、人生の事実を言っているのです。素晴らしい能力を持っている私達人間も、神の大決定の内にある者にすぎないのだという事実を語っているのです。

「まず死を習うて後に生を習うべし」と言った人がいます。これは、自分の人生の主人が自分ではなく、神の大決定のもとにあることを、よく心得て日々生活することを語っているのです。

自分の生が神の大決定にあることに気づくことは有り難いことです。なぜなら、自分は神の手の中に生かされている素晴らしい者であることに気づくからです。その時、私たちは、いろいろな思い悩みがある人生であっても、生きて行ける、生かしていただける、生きて行こう、と思ふのです。

思い悩むな。あなたがたの天の父(神)は、これらのものがみなあなた方に必要なことを存じてある。

「マタイ六章二五節以下」
喜ぶ時も悲しむ時も、安心の時も不安の時も、神の大決定の時に包まれていてそれぞれの時であることを知り、祈り心を持ちつつづけて参りましょう。



報いてくださる

松下昌義

だから、あなたが祈るときは、奥まった自分の部屋に入って戸を閉め、隠れたところに祈られるあなたの父(神)に祈りなさい。そうすれば、隠れたことを見ておられるあなたの父(神)は報いてくださる。

— マタイによる福音書六章四節以下 —

神は「隠れたところ」においてになる、とイエスは言われます。そして、あなたの「隠れたことを見ておられ、報いてくださる」というのです。

これは、「神はあなたのすべての言動を監視し、悪には罰を、善には奨を報いられる！」という意味での語りではありません。このイエスの言葉は、とても慰めと希望と愛に満ちた語りかけなのです。

× 「神は隠れたところにおいてになる」とはどう言う意味なのでしょう。それは、「あなたの生きている根っこのところにおいて、あなたの命を直接支えておられる大いなる命」の有り様を示しているのです。

例えば、樹木の根っこは、幹や枝や葉、花や実の立場からは見えません。言わば隠れているものです。しかし、その根っこの働きが、その樹木の今、今のすべてを支え生かしているのです。つまり、「隠れたところ」は、わたしたちが生きているその命の成り立ちの座そのことなのです。

× × では「報いてくださる」とはどう言う意味なの

でしょうか。それは「善行には幸いが、悪行には裁きがあるぞ!」とか、「今は苦しいけれども、善いことをしていれば、やがて幸いが来る。とか、死んでから天国や極楽に行くことが出来る!」ということではありません。一般に宗教や道徳的な教えにはそのような語りがあり、ときとして権力者や宗教等は、この教えを利用して、人々を自分たちの欲するままに操ろうとします。

イエスが「報いてくださる」と言われるのは、人は今、今、無条件に生かしていかださっている、という意味なのです。だからイエスは「空の鳥を見なさい。野の花を見なさい。彼らは生かされているではありませんか。神は今、今に彼らを生かしておいでになるのです。何と有り難い大いなる命なる神の「報い」でしょうか、と言われるのです。

× 神の大いなる命、命のたぎりそのことは、そのものの善悪を越えて、そのものの足下に漲っているのです。その命のたぎりはすべてのものを生かす神の愛の躍動なのです。

× 「神の報い」は現在の事です。このように「隠れたところにいます大いなる命の神」に、目覚めた人は、この世がどのようなものであっても、「生きて行く」「生きて行く」「生きて行くのだ」という力と希望と安心とが、心の深くに湧き上がってくるようになるのです。そして、その事を基礎にして、その人の器量に相応しい「善行もしょう」「感謝もしょう」「赦すことも出来る」という思いが、その人の内に自然に生まれ出てくるようになるのです。大切なことは、「隠れたところ」にあって、報いてくださる大いなる命のたぎり」に目覚めることです。



りきむのは
やめましよう

松下昌義

神聖なものを犬に与えてはならず、また、真珠を豚に投げてはならない。その足で踏みにじり、向きなおってあなたがたにかみついてくるだろう。

— マタイ福音書一五章一三節 —

或る宗教の教えや、一つの主義主張、または世間の常識等を、自分の生きる最上の信念、生きるよどころと確信し、それに凝り固まってしまった人。このような人は本当に困り者です。

自分の考えや生き方が最も正しいと信じ込んでいるのですから、はじめから、他のことには聞く耳をもとうとはしません。その姿は、傲慢、高慢、排他的、自分中心的、批判的、自惚れ……以外のなにもでもありません。

しかし、そのような人について更に困ることは、「自分は最も正しく、もっとも優しく、もっとも正常な感覚の持ち主である」と思い込んでいることです。その結果、自分の生き方が、自分の周囲にいる人達にどれほどの迷惑をかけているか、ということに、全く気づいていない、ということですよ。

表記の言葉でイエスさまが「犬」と言い、「豚」と言われた当の者は、ユダヤ教の祭司やパリサイ宗の指導者です。祭司やパリサイ宗の人達は、世間で言う「悪人」ではありません。熱心に神の掟（おきて）を日々守り、誠実に生きようと心掛けている人達です。なのに、イエスはなぜ彼らを「犬」と言

い、「豚」と言われたのでしょうか。

問題はどこにあるのでしょうか。それは自惚（うぬぼれ）です。神を口にしながら、その実、「自分こそ一番正しい」と思い込んでおり、その自分についての思い込みを、自分の拠り所とする自惚れに生きています。このような者をイエスさまは「偽善者」といわれました。彼らは一見謙虚に見えて、極めて傲慢。優しく見えて、その実、極めて冷酷。ですから、イエスは次のように言われました。

あなたがたを殺す者が皆、自分は神に仕え奉仕していると思ひ込む時が来る。彼らがこういうことをするのは、神をもわたしをも知らないからである。

— マタイによる福音書一六章二節以下 —

人間は「思い込みをする」動物です。何も考えることなく、ボクと生きる人、目先の欲望満足だけに生きる人もいますが、自分の思い込みに熱心に生きる人も困り者です。イエスさまは肩肘張らず、カラリとした生き方を私たちに示してくださいました。私は彼らが熱心に神に仕えていることを証しますが、この熱心は、正しい認識に基づくものではなく、自惚れです。なぜなら、神の義を知らず、自分の義を求めようとして、神の義に従わなかったからです。

— ロマ書十章一節以下 —
神を知るといふことは、スツカラカンになって、日々感謝して一日一日を一生懸命に生きることです。そこでは、真理だの、神だの、救いなどといったことは消えて無くなってしまふのです。力むのはやめましよう。

宗教的生き方

松下昌義

心の貧しい人々は、幸いである。

天の国はその人々のもののである。

柔和な人々は、幸いである。

その人たちは地を受け継ぐ。

哀れみ深い人々は、幸いである。

その人たちは神を見る。

— マタイ福音書五章三節以下 —

「宗教」とは何か。いろいろな見解があるでしょうが、「宗」とは「こころね」つまり、心の根っこの「教え」だと思います。

心の根っことは、私たちの生きる舵取りをしているいちばん深いところの働きです。それは、とても地味で外からは見えません。しかし、その人の生き方を方向づける働きをする意味で、とても大切なものです。言うならば、「宗教」とはその人の生き方を決める「心の持ち方」を方向づける働きの教えだといえましょう。

人柄（人格）はその人の「心の持ち方」で決まります。悪い心を持っている人の人格は歪んでいますし、善い心を持っている人の人格は正しく真っ直ぐです。でも、善い心の持ち方とか悪いこころの持ち方はどのようして生まれてくるのでしょうか。また、善い悪いの基準はどこにあるのでしょうか。

聖書は「心の貧しい人は、幸いである」と教えています。幸いな人、それは善い心の持ち方をしていく人だと言うのです。

では、「心の貧しい人」とはどのような人でしょうか。それは、自分の主人は自分でなく神であることを知っている人です。これを一口で言うと、「自分という主体性が無くなって、神さまこそが自分の主人であることに気付いた人」のことです。つまり、自分の我（が）というものを、「自分が、自分が」という「我」（が）を唯一自分の生きる拠り所とする生き方を捨て、神こそが自分の命の根っこだと気づいた人のことです。

「自分」を捨てるのが宗教ではありません。神さまの恵みに自分が生かされている者が「自分」であると気づくことが宗教です。そのような人が「その人たちは神を見る」ということです。不思議な神の幻を見ることではありません。神さまの命に生かされている「自分」に気づくことが「神を見る」ということです。

宗教において絶対に間違ってはならぬことは、自分の「我」に神を取り込んでしまってはならぬ、ということと、自分の思い込みで神を作り、利用しそれを拠り所として「自分の我」の満足を充たせようとすること、それは自分勝手に作った真理や正義の幻想に生きる独善者、エゴイストです。まさに原理主義的宗教人にこのような人を見ます。政治的野望や権力にしがみついている「宗教」にも同じ独善とエゴをみることが出来ます。

宗教信仰は、自分を神様の御愛にお委ねしてこの世の苦勞の中でも生きて行ける、生きて行く、生きて行くのだ、という安心を希望とを心根に頂くことです。



あとがき

この冊子は「みちしるべ霊操」に書かれたものを一冊にまとめたものです。

冊子作りに加わり、松下先生の読みやすい、親しみやすい文の中に安らぎを感じるこ
とが出来、また、一冊一冊出来上がる喜びを味わうことが出来ましたことをとても感
謝しています。

私たちの人生には、さまざまなことが起こり自分ではどうしようもない悩みや悲し
みに出会うことがあります。どうかみなさまの心の支えとして、この冊子が少しでも
お役にたちますよう、お祈り致しております。

今回の冊子作りにあたり、林順子姉、瀬川知子姉、岩島佳子姉のご協力に深くお礼
申し上げます。

二〇〇二年八月二〇日

熊田淑子

みちしるべ文庫 三一

『その差は大きい』

二〇〇二年七月三〇日 発行

二〇〇三年七月一〇日 (第二版)

著者 松下昌義

発行所 左京キリスト教会

京都市左京区下鴨南茶の木町二九

電話(〇七五)七八一―九六四〇